



アオミドロ語誌 (3)：陟厘・アオノリ・アオミドロ

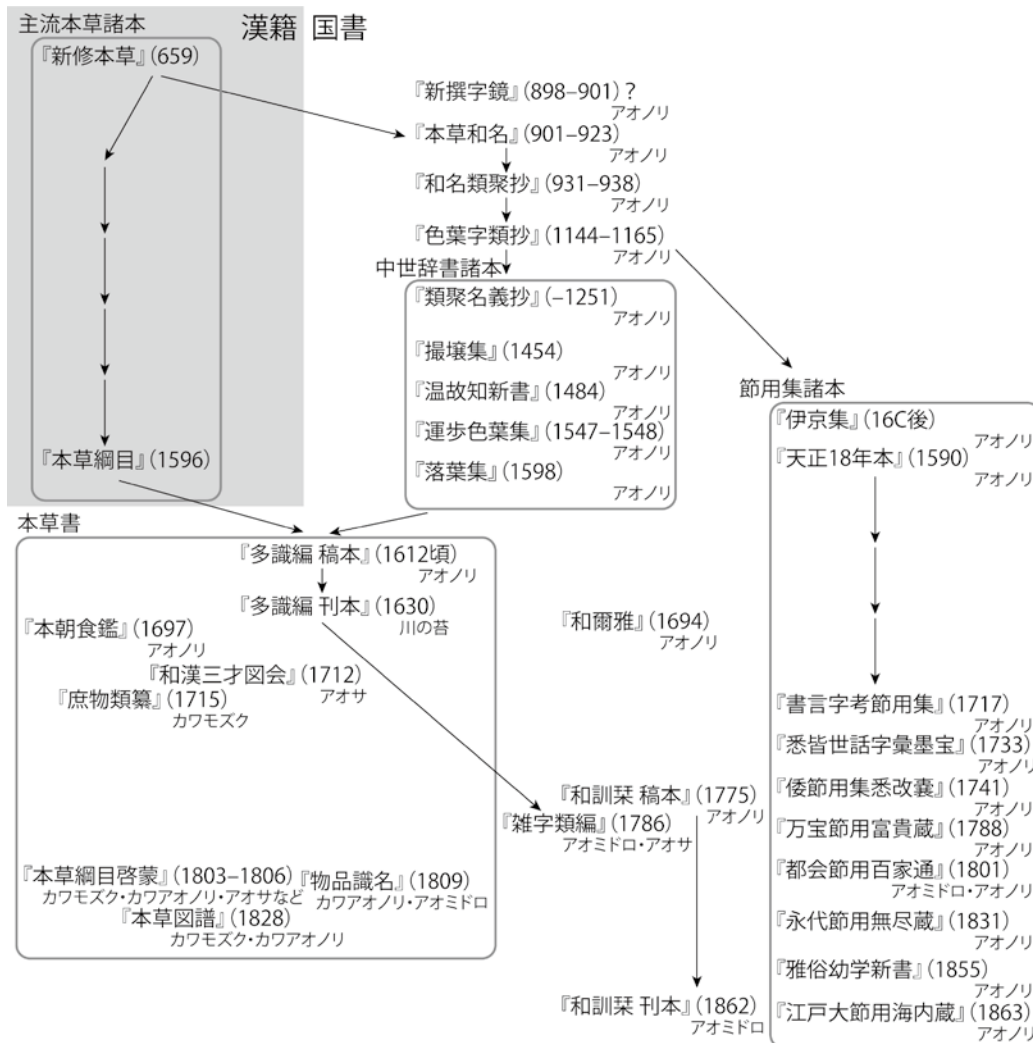
仲田 崇志

『雑字類編』(柴野栗山, 1786 刊) においてアオミドロは陟厘と書かれた(前号『語誌 (2)』参照)。しかし陟厘は漢語で、日本では当初アオノリとされた。ではいつから淡水藻になったのか。国内の(国書の)用例を追跡してみた(図)。

陟厘の語は中国本草学から、『新修本草』(蘇敬, 659 成立)により日本に伝えられたようだ。国書では、『新撰字鏡』(昌住, 昌泰年間 [898-901] 成立。天治本 12 卷 31 丁裏)や『本草和名』(深根輔仁, 延喜年間 [901-923] 成立。岩瀬本上巻 34 丁表)に登場し、「水中石上生如毛綠色者」(岡西 1978. 重輯新修本草, p. 59)という記述に基づいて同定されたのだろう。

日本の本草学は『本草綱目』(李時珍, 1596 刊)の伝来によって最盛期を迎え、陟厘の意味も再考された。林羅山は同書を紹介する際、『多識編』の稿本(1612 頃, 21 丁表)では陟厘をアオノリとしたが、刊本(1630 刊, 上巻 47 丁表)で川の苔に改めた。『本草綱目』に一名として示されていた「河中側梨」(金陵本 21 卷 3 丁表)に注目したのだろう(ただしこの記述は『新修本草』にもあった)。

その後、『雑字類編』に加え、本草書の多くが陟厘を淡水藻とみなすようになった。一方、主に節用集では引き続きアオノリとされ、明治期に漢名の使用が廢れるまでこれらの意味が併存することになった。



陟厘が指した藻類の変遷。主要な辞書・本草書の系譜とともに示した。背景色は漢籍(灰)・国書(白)の別を示す。年号は成立年または刊行年。節用集については確認した最も古い版の刊行年を示した。